

ごあいさつ

大学院文学研究科長

山根耕平

大学院研究紀要第6巻が安藤忠先生と山崎英則先生の退職記念号として発刊されます。両先生のこれまでの本学大学院の教育研究に対する多大な功績を称えての発刊です。安藤先生は、大学院発足の折からのメンバーで、障害児教育に関する研究指導を多くの学生に行っていました。山崎先生の専門領域は教育哲学で、多くの学生の、とりわけ留学生の教育研究指導を熱心に行っていました。両先生に共通して特記すべきことは、お二人とも、多くの著書が出版され、その領域において社会に大いに貢献されたことです。大学としてもたいへん名誉なことで、誇りに思っています。改めて感謝申し上げます。

本号には、各教員及び大学院生の研究成果が、単著と共著を合わせて13本掲載されています。テーマも多様で、労作ばかりです。執筆者の方々に敬意と感謝を申し上げます。

さて、今年は、ここで少し、学部と大学院との連続性について、お話させていただきます。教育研究の継続性と一貫性の観点からも、それは大切なことだと思うからです。民主党政権になってから教員養成6年制も話題になっていることもあり、一言、私の考えを披瀝したいと思った次第です。

今年の入試でも、外部からの志願者が多く、教育学専攻の場合、留学生に見られるように、教育学の門外漢の人が多という傾向が見られます。その場合、2年間で質の高い研究を行い、その成果として修士論文を完成させるということはたいへんむずかしい作業となります。そのために、そういう院生には、不十分とはいえ、学部の教育学関連の基礎科目を履修させるという指導を行っています。

今や、学部の4年間と大学院の2年間を連結させて、6年間の教育研究を構想する時期に来ていると思います。少なくとも、入学時にガイダンスを行い、3年次の履修時期には、具体的にそこから大学院までの4年間の研究計画を大まかでも立てさせることが必要だと思います。そして、4年次には数科目、大学院科目を履修させる（今でも制度上、4科目まで履修可能）という指導を行う。心理臨床学専攻でも、早い段階での動機付けが肝要と思います。英語力についても入学時からの指導が必要でしょう。

教育研究は、本来、ゆっくりと時間をかけて、「醸成する」環境と文化が必要だと思います。研究分野での速成の果実を心配しているわけです。研究紀要のあいさつとしては、少し、違和感がありましたが、先生方に問題提起をさせていただきました。

大学院担当の先生方と院生のますますの研究の活性化を期待しています。